

特別寄稿 中国・台湾訪問記 再来一杯茶《5》

※四川省成都の麺

中国四川省の成都の空港で飛行機に搭乗するまで時間があつたので、時間を潰すため空港内の本屋に入った。そこで小中学生向けの故事成語の成立を記した本があつたので買い求めた。その中に「一挙両得」があつた。一挙両得の意味を知っていても、その成立が分からなかつたので興味を持って読んだ。その本によると、ある村に虎が現れて村人が襲われた。村人は虎退治のため、隊を作り山に入った。山の中で若い虎と村を襲った虎がにらみ合っているのを見つけた。直ぐに虎を捕えようとした人を隊長が諫めた。「あの虎たちはどちらかが死ぬまで戦うだろう、そうすれば生き残った方も疲れて捕まえ易い」。事実そうになって、2匹の虎をやすやす捕えることができた。この故事から一挙両得ができたそう。ちなみに一挙両得と同じような意味の一石



天壇公園(北京)

二鳥があるが、これはヨーロッパの成語で漢語ではないようだ。

さて四川旅行で思いがけないことを発見した。中国は「麺の国」なので麺は美味しい!と思ひ込んでいたが、北京の天壇公園を観光した後、近くの麺の店に入って醬醬麺(ジャージャー麺)を食べた。麺はぼろぼろした感じでひどく不味かつた。この経験から「何か麺の国だ!」と思っていた。ところが四川で食べた麺の素材は、日本の腰のあるつるつるの麺と同じでなかなかイケた。しかしスープが問題だ。赤ペンキで染めたような、唐辛子で真っ赤なスープには少々腰が引ける。少し薄めの中国ビールを飲みながら「再来一瓶啤酒(もう1本ビールをください)」と言って辛い麺を胃に流し込んだ四川の食事だった。

四川は中国の中で最も辛い味を好む地域である。成都に来て麺以外で美味しい料理を発見した。それはサイコロ状にカットした肉を、山盛りの唐辛子の中で炒った料理である。唐辛子の山の中から、箸で肉片を探しながら食べるのであるが、ビール好きの私の口に合った味であった。肉を食べ尽くした皿には、唐辛子の山だけが残る四川料理であった。

※台湾の麺

麺はうどん・ラーメンや蕎麦を思い浮かべるが、中国では、餃子・シューマイやパンも麺だ。パンは中国語で「麵包(メンパオ)」と言う。要するに小麦粉を利用した食べ物すべてが麺である。

台湾の街で良く目にする「牛角」の看板を見て、ステーキ店かと思うが違ふ。実は中国語ではパンのクロワッサンのことだ。クロワッサンが牛の角に似ているからである。

台湾に古い商業の街、三峡老街がある。この街は道路の両側にずらりと赤レンガの古い建物が並び通りがあり、日本統治



三峡老街の入口(台湾)

時代に完成したとのこと。三峡老街はクロワッサンの名産地だそう。早速試食してみた。形・色とも日本のクロワッサンと同じだが、食感は違っていてビスケットのように硬くこれが特徴のパンだった。



三峡老街通り(台北ナビ)

台湾では、餃子やシューマイなどの包子(パオズ)の美味しい店が多い。ではうどんはどうかであるが、牛肉麺がなかなか美味しい。麺の上に柔らかく煮た牛肉が乗っている。これに香菜(セリ科の香りが強いハーブ)を乗せて食べる。しかし最も美味しいのは高崎にある台湾料理の店で、台湾出身の奥さんが作る牛肉麺だ。この牛肉麺は麺が美味しい。高崎は小麦の生産地だが、麺の美味しさと関係があるかもしれない。

もう一つ台湾で忘れられない麺がある。それは担担麺(ダンズーミイエン)とも言われる担々麺である。同じ発音で四川発の担担麺もあるが、内容はまったく異なる麺だ。どちらも天秤棒で担いで売り歩くことから名づけられた麺だそう。台湾の担々麺は、元は漁師の料理だそうで、エビや貝が具材として入っている。湯飲み茶碗のような小さな器に入れて出してくれて、私は台湾ビールのつまみとして良く食べた。もちろんビールは1本で済む訳がなく、「再来一瓶啤酒(ビールをもう1本ください)」と言い担々麺を堪能するのである。

残念なのは台湾で非常に美味しい担々麺の店を知っていて、訪台の都度通っていたがある日急に味が落ちてしまった。コックが転出したのだろう。それ以来この店には行かなくなった。

※劉連仁の子息との会食

劉連仁は孔子の出身地と同じ山東省の人である。戦中に北海道の炭鉱に強制連行されて来た人であるが、あまりにも過酷な扱いに終戦直前の昭和20年7月に逃げ、終戦を知らずに13年間北海道の山中で暮らした人だ。彼は中国に帰国後、日本に対して強制連行があったとして裁判を起こしたが2000年9月に亡くなった。裁判は彼の長男が引継いで、そのために来日した。その時に日中友好協会主催の会食が前橋のレストランで行われた。私を除く日本人は皆中国語が堪能なので通訳がいらないと思って参加したが、主催者は北京から来日していた留学生に通訳を頼んでいた。山東省の中国語は分かり難いと聞いていたが、いざ聞いてみると全く分からなかつた。通訳の北京人の彼女も、何度も「え?」と聞き返してようやく意思が通じる有様であった。山東省訛りの中国語は、標準語からだいぶ離れているようだ。

やっとの思いで私が聞き出したのは、今中国で何の仕事をしているかで、それによると「トラックを数台持っていて運輸業をしている」とのこと。仕事は順調のようだった。

さて地裁の裁判の結果だが、幸いだが勝利した。しかし上告審では棄却されてしまった。戦争による補償は国同士で決着したのが理由とのことだが、何か釈然としない結果を後で知った。

◆記事

嵯峨 良平 (昭和43年電気科卒)

“乾杯!”からはじまる感動のひととき。

BANQUET / ACCOMMODATION / RESTAURANT
宴会・会議 / 宿泊 / レストラン



アルカディア市ヶ谷
SH 私立 学会館 AN
http://www.arcadia-jp.org

〒102-0073 東京都千代田区九段北4-2-25
TEL 03-3261-9921 FAX 03-3261-7760



JR線・地下鉄(有楽町・新宿・南北線) 市ヶ谷駅 徒歩2分